

コンゴ共和国北東部に居住する狩猟採集民アカの 考え方や社会関係のあり方についての試論

北西 功一*

A Study on the Way of Thinking and Social Relationships of the Aka
Hunter-Gatherers in Northeastern Congo

KITANISHI Koichi*

(Received September 27, 2019)

1. はじめに

本稿で扱うテーマについて考え始めたのは初めてコンゴ共和国で狩猟採集民アカ (Aka) の調査を行っていた1992年のことである。社会のいろんな側面に彼ら独特の思考や行動の様式¹⁾を見ることができ、それらには何らかのつながりがあるとずっと感じていたのだが、それを文章として書き表すことがなかなかできなかった。しかし、2017年に雑誌Current Anthropologyで発表されたBird-Davidの論文「Before Nation: Scale Blind Anthropology and Foragers' Worlds of Relatives」を読んだことがきっかけで、ようやく書くための糸口が見えてきた。この論文は難解であるが、誤解を恐れず簡潔に表現すれば、狩猟採集民 (Bird-Davidは南インドの狩猟採集民Nayakaを調査対象としている) に典型的にみられる常に顔を突き合わせている小さな集団での人間関係のあり方が、多くの人たちと接する社会 (典型的には都市での生活) での人間関係のあり方と異なっているという話である。一例としては、Nayakaの人たちは自身が居住する集団に「何人の人がいる」ではなく、「誰と誰がいる」というように考えるというものがある。私もアカの調査の中で同じようなことを感じていた。

このような狩猟採集民の社会や人間関係、考え方の特徴についてはIngoldやBird-Davidなどが以前から議論している²⁾ (例えば、Ingold (1986)、Ingold (1999)、Bird-David (1990)、Naveh & Bird-David (2014) など)。私自身もアカの食物分配について考える時に彼らの議論を参考にしてきたが、食物分配以外の面でも応用できるのではないかと考えるようになった。本稿では、アカにおいて、沢山の人や物がある場合でもそれを数え

るのではなく個別に考える傾向にあること、人々をカテゴリー化しそれごとに厳密な役割や義務、禁止事項を与えていないこと (ただし、多数の事例を集計すると見ると一般的な傾向はみられる)、誰が誰に食べ物を分けるかや誰と誰が共に住むのかといったことにルールが見いだせずケース・バイ・ケースで物事を判断していることなどを取り上げる。これらは共通のアカの考え方や社会関係のあり方に基づいているのではないかと考えている。

本稿では、これまで私が研究テーマの中心としていた食物分配のように多くのデータや事例が存在する部分がある一方で、わずかな事例しかなく十分に立証できているとは言えないところもあるが、まずは試論として踏み出してみたい。

2. 調査地とそこに住む人々

中部アフリカの熱帯雨林地帯には、一般に「ピグミー」と呼ばれる狩猟採集民が居住している。ピグミーにはいくつかの言語が異なるグループが存在するが、私が調査を行ったのはコンゴ共和国北東部から中央アフリカ共和国南部にかけて住んでいるアカという人たちである。彼らはバントゥC10グループに属する言語を話している (Bahuchet, 1992)。彼らの人口は古いデータではあるが30,000人と推定されている (Hewlett, 1996)。

私は1991年10月～1992年11月および1995年8月～11月の2度にわたり、延べ15カ月間、コンゴ共和国北東部のリクアラ (Likouala) 州ドンゲー (Dongou) 地区のモタバ (Motaba) 川最上流にあるリンガンガ・マカオ (Linganga-Makaou) 村 (北緯2° 36分、東経11° 10分) 周辺に居住するアカを対象に調査を行った (図1)。

* 山口大学国際総合科学部

つまり、本稿で取り上げる話は論文執筆時から30年弱前の話である。現在（2019年）の彼らの生活は調査時と大きく変化していることが予想される。

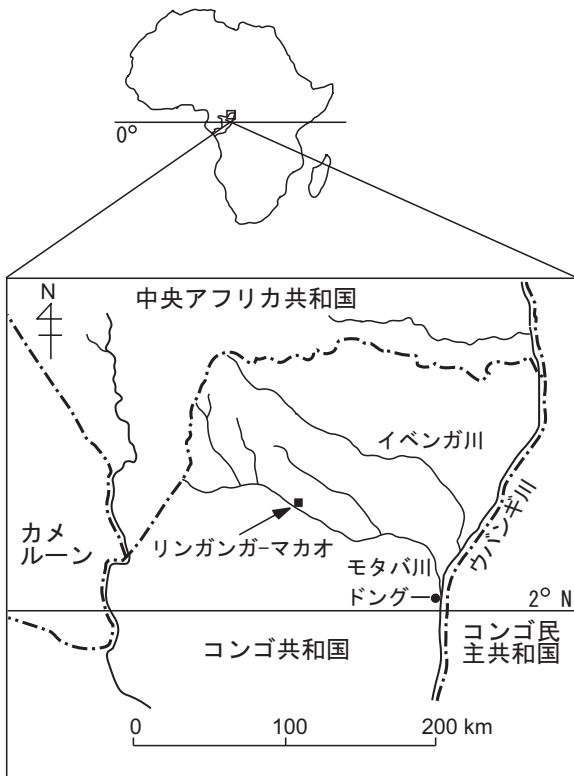


図1 調査地

リンガンガ・マカオ村はバントゥ系農耕民イケンガ (Ikenga) によって作られた村で、調査時にはおよそ220人の村人が住んでいた。彼らはキャッサバ栽培を中心とする焼畑農耕に加えて、森で銃猟を行ったり、モタバ川やその支流、湿地帯で網や釣り針、その他いろんな道具を用いた漁撈活動を行ったりしていた。

調査時にはリンガンガ・マカオ村周辺におよそ350人のアカが住んでいた。彼らは何らかの親族関係にある人たちが15~100人程度の居住集団を形成していた。1991~1992年には9つ、1995年には12の居住集団が存在した。これらの居住集団をもとにアカはキャンプを形成し、移動しながら生活を送っていた。大きな集団では一時的に分裂して別々に暮らすこともある。また、他の狩猟採集民でも言われているように、集団のメンバーシップは柔軟で、メンバーの移入・移出は頻繁に見られた。

リンガンガ・マカオ村のアカの生活は大きく2つに分けられた (Kitanishi, 1995)。森における生活と農耕民の村近くにおける生活である。森における主要な生業活動は槍、罟、網などを用いる狩猟と、ヤム、ナツ、ハチミツ、イモムシなどの採集である。森のキャンプは数週間から数カ月で新たな森のキャンプもしくは村近くのキャンプに移動していた。村のキャンプは決まった場所

に作る居住集団もあるが、森から来るたびに新たに形成する集団もある。村では農耕民の農作業の手伝いやその他の雑用を行い、農作物や塩、タバコ、酒などを見返りにもらっていた。男性は農耕民から貸与された銃を用いて狩猟を行うこともある。主な食料はキャッサバなどの農作物や村周辺にたくさん生えているアブラヤシからとれるヤシ油、銃猟から得られる肉で、季節的にイモムシが大量に採集される。調査期間中の観察から1年のうち4~8カ月を森で過ごし、残りを村近くで過ごしていた。

3. 数を数えること

まず、私が本稿で取り上げるテーマについて考えるきっかけとなった事例について紹介しよう。私のアカを対象とした調査の当初の主要な目的は、彼らの生業活動を定量的に明らかにすることだった。食物が森で狩猟採集されそれが彼らの口に入るまでの過程を明らかにすること、具体的には、いつ、どこで、誰が、どんな食物を、どのように獲得し、さらにそれをどう分けられているかということであった (Kitanishi, 1995; Kitanishi, 1996; 北西, 1997)。彼らの森での食料獲得活動は狩猟、ハチミツやイモムシ、食用となる植物の採集からなっている。狩猟は彼らにとってエネルギーおよびタンパク質を獲得する重要な手段であり、主に男性の仕事である。そのため、誰がどのような方法でどれだけの肉を獲得しているのかといった基本的な情報を集めていた。

彼らが最もたくさんの肉を得ていた狩猟方法は罟猟であった。彼らが用いる罟は跳ね罟と呼ばれるものである。材料は細い鉄製のワイヤーと木の棒である。ワイヤーで輪を作り、引っ張られると輪が小さくなるように結び、ワイヤーの先を木の棒に結びつける。棒の另一端は地面に刺し、棒をたわめてワイヤーの輪が地面に丸く広がるようにする。さらに木の棒がたわんだままの状態にするために地面に刺した小さな分岐のある棒にワイヤーを結びつける。その留め具の棒を輪の真ん中を通る細い棒とつなげ、その細い棒は動物に見えないように枯れ葉などを載せておく。動物がその細い棒を踏むと留め具がその棒から抜け、たわんでいた木の棒がまっすぐに戻る力で跳ね上がり、輪の中にある脚がワイヤーで縛られて、逃げられなくなる。

私は男性がそれぞれいくつの罟を仕掛けているのかを知りたいと考えた。その時私は合計80人程度からなる最も大きな集団で調査をしており、その集団の最年長の男性で集団の中心的なメンバー (アカ語でkombetiと呼ばれる) であるA氏に、あなたの罟がいくつあるのかと質問した。しかし、彼は私の質問の意味をなかなか理解してくれなかった。私が罟に興味を持っていることは理解したようなのだが、その数を尋ねていることがわから

なかったのである。結局、私は彼と一緒に仕掛けた罟を見て回るようになった。朝に1時間程度の時間をかけて全部の罟を見たのだが、その時、そこに罟があることを示すために、わざと罟の留め具を外して罟を跳ねさせた。彼は21個の罟を見せてくれた。しかし、彼はもう一度罟を仕掛け直さなければいけなくなった。私が知りたかったのは罟の数で、個々の罟の具体的な状態ではなかったので、彼に手間をかけさせ過ぎて申し訳なく思ったとともに、なぜ「いくつ」という質問が伝わらなかったのかということが心の中に疑問として残っていた。別の男性に同じ質問をしたときには簡単に理解し、数を答えてくれたので、なぜA氏だけがという思いもあった。

1971年に中央アフリカ共和国南部のロバイ (Lobaye) 川流域のモングンバ (Mongoumba) 村に住むアカの調査を始めたフランス人研究チームによると、アカの数字は1から5までで、それより多い場合には「たくさん」になるという (Thomas et al. 1993)。A氏はこの集団で最年長者なので以前と同様の考え方をしていたのかもしれない。とはいえ、A氏が私と罟を見て回ったとき、彼は一つ一つの罟がどこにあり、どのように仕掛けられているかをすべて正確に記憶していた。それを覚えていなければ罟猟ができないだろう。当前だが、大きな数字が数えられないということは彼の知的能力が劣っていることを示しているわけではない。彼は単に彼の罟をひとまとめにして、21個の罟という表現をしなかっただけである。

A氏にとって21個の罟があるということは、罟を仕掛け見回るときにはあまり意味のないことなのかもしれない。実際に必要な情報は個々の罟の状況 (場所や仕掛けられ方) である。21個と数えるためには、個々の罟を具体性が排除された抽象的な罟と見なす必要がある。

このような思考法の傾向は罟だけではないように思われる。Bird-David (2016) はNayakaにおいて一緒に暮らす人々を人数で表すことがないという事例で、似た分析をしている。小さな集団で暮らしているNayakaは、抽象的な人と暮らしているのではなく、具体的なさまざまな属性や性格を持った人と暮らしていると考えられる傾向がある。私達も抽象的な人々ではなく具体的な個々の人々と生活しているのであるが、数多くの人々がいるためすべての人々の個々の性格を記憶したり、それに基づいて対処するのは不可能であり、人々のカテゴリー化を行って、人数で表したり、ひとまとめに対処することが多い (大学1年生の学生が20人など)。アカは何らかの基準で人をカテゴリー化して対処するということがあまりしないのであるが、これについては後で取り上げる。

個々の差異を無視して抽象的な概念としてモノを量

的に表すというやり方で最も極端なものが、モノをお金で価値付けするということである。世の中のいろいろなモノの使用価値は質的に異なり、その観点から異なるモノを量的に比較したり評価したりすることはできないが、貨幣という基準で価値付けすることで量的に表現することが可能になる。そして、そのモノの持つ使用価値を捨象して、〇〇円ということだけに注目することによって、多くのモノを量的に比較し、貨幣と交換することが可能になる。罟の数についての質問を別の男性は簡単に理解していたが、その男性の多くはドングーという町での生活の経験があり、現金を使ったこともあったと思われる³⁾。お金を使うためには大きな数の理解が必要なことは当然であるが、それに加えてモノを抽象化して量的に見る視点も身につけていたのかもしれない。

このように、モノや人を抽象化して数として見るよりも、個々のモノや人に注目することが、商品経済や外部社会の影響を強く受ける以前の彼らの思考法の特徴⁴⁾であるというのが私の仮説である⁵⁾。この仮説をもとに彼らの食物分配や居住集団のメンバーシップについて分析すると、より彼らのやり方を理解できると思われる。以下はこれを示していきたい。

4. 誰に何をどれだけ分けるのかをどのように決めているのだろうか？

狩猟採集民は手に入れた食物を他の人たちに分配することが知られており、ピグミー系狩猟採集民においても同様のことがみられることが先行研究で指摘されてきた (市川, 1982; Bahuchet, 1990)。私はアカがどのように、そしてなぜ食物を分けるのかということ明らかにするために、彼らの食物分配についてのデータを収集し、分析してきた。その結果は北西 (1997; 2001; 2004; 2010b) 及びKitanishi (1996; 2000) を参照していただきたいが、その分析において私が気になっていたことの一つに、食物分配についてのルールがほとんど存在しないということがある。彼らには少なくともたくさんの肉 (もしくは他の食物でも) を手に入れた場合には他の人に分けることが望ましいといった、漠然とした暗黙の了解はあり、また大量の分配のデータからは分配における傾向がいくつか存在することが明らかになった (北西, 1997)。しかし、ある状況においてある人に必ず肉 (特定の部位の場合も) を分けなければいけないという厳密なルールがあるのは次に述べる狩猟における獣肉の第一次分配しかない。その他に食物分配にかかわるルールとしては、獲得した食物の所有者を決めるルールがあるくらいである。これらのルールについて説明した後、他にルールがないことについて考えてみたい。

まず、食物分配に関わるルールについて取り上げる。

獲得した食物の所有者の決め方としては、実際に狩猟・採集した人以外の方が所有者になる可能性がある場合について説明しよう。集団槍猟では最初に打撃を与えた槍の所有者、網猟では獲物がかかった網の所有者、罨猟では獲物がかかった罨の所有者が獲物の所有者になる。つまり、獲物を捕えるために最初に獲物と接触した道具の所有者が獲物の所有者になり、実際に獲物を殺した人と一致しないこともある。ハチミツ採集ではハチの巣を発見した人が所有者になり、実際にハチミツを採集した人ではない(北西, 1997)。食物分配は所有者を決定することから始まる。原則としてその所有者が食物を誰にどれだけ分けるのかということを決めていく。

狩猟で得られた獣肉は3つの段階で分配される。第1次分配は狩猟において果たした役割に基づいた分配、第2次分配は肉の所有者もしくは第1次分配を受けた人の獣肉の分配、第3次分配は他の食材とともに調理された料理の分配である。このうち誰にどれだけもしくはどの部位の肉を分配するかというルールが存在するのは第1次分配だけで、第2次分配、第3次分配は肉や料理の所有者の裁量で分配が行われる⁶⁾。

集団槍猟でイノシシを仕留めた場合の第1次分配について説明する。最初に獲物に打撃を与えた槍の所有者が獲物の所有者になるが、最初に獲物に打撃を与えたハンターは獲物の尾の部分もらう。2番槍の所有者は腰の部分、3番槍の所有者が頭の部分もらう。網猟では獲物がかかった網を張った人が頭の部分、網にかかった獲物を捕まえた人が胸腹部と腸を得る。罨猟では獲物がかかっているのを発見した人や罨にかかっている獲物を殺した人、獲物をキャンプまで運んだ人といった協力をしてくれた人に対するルールとして決まった分配はない。ただし、実際には第2次分配でこのような作業をした人が肉を手に入れる可能性は大いにある。

このように、狩猟で果たした役割に基づく分配についてのルールはいくつか存在するが、所有者と特定の親族関係にあると分配をしなればいけないというルールは存在しない。料理の分配では所有者とより近い親族関係にある人がより頻繁に分配を受けることが定量的な分析で明らかになっているが(北西, 1997)、それはあくまでも傾向や確率の話であって、分ける義務が存在するわけではない。例えば、子供が親に必ず食物を分けなければいけないといったルールはなく、また子供が親に分配をしないと彼らの倫理に反するといったことはない。実際に親子で同じキャンプで暮らしていても食物を分配しないことはしばしば観察される。さらに、特定の社会的地位にある人に必ず分配をしないとイケないということもない。例えばアカの居住集団にはkombetiと呼ばれる中心的な人物が存在するが、彼に必ず分けないとイケ

ないといったルールは存在しない。年長者は経験を積んだ人として尊重・尊敬されているが、分配の義務はない。彼らの心の中までのぞけるわけではないのであくまでも推測であるが、自分がどれだけの食物を所有しているか、その場に誰がいるのか、そこにいる人たちそれぞれとどれくらい仲がいいのか、誰がどれくらいお腹を空かしているのか、などといったことをもとに分配相手を決めていると思われる。つまり、その場の具体的な状況に応じて分配相手を決めているのであり、親族関係が近いことはその判断材料の一つにはなるかもしれないが、ルールや義務があるわけではない。

大人や子供のアカが数人いた場面で、私は具体的な状況を説明せず、単にある人がある人に獣肉を分けるのかという質問をしたことがある。彼らは私の質問の意図をなかなか理解できなかったが、私は何回も繰り返して質問した。そのうち、彼らはその質問に嫌気が差したのか、結局この人にも分けるしあの人にも分ける、結局私が名前を挙げた人すべてに分けると答えた。私としては特定の親族関係にある人とかに必ず分けるといった答えを期待していたのだが、そのような答えは出てこなかった。これは先に述べた実際の分配の分析の結果と一致する。私とその質問で気になったのは、私の質問の意図をなかなか理解できなかったこと、さらにとても答えにくそうにしていたことである。つまり、彼らは具体的な状況のもとで食物分配の相手を決めていて、すべての状況に当てはまるような分配のやり方といったものを想定していないと考えられるのである。

このような彼らの考え方は前章で説明した罨の数を数えないことと類似している部分がある。もし子供が親に獣肉を分配しないとイケないというルールがあり、SさんがTさんの息子であったとしよう。Sさんが肉を手に入れたときTさんに分配するとしたら、それはSさんとTさんの間の具体的な関係によるものではなく、「子供」と「親」という抽象的な関係に基づいて分配をすることになる。つまり、親族関係に基づいた分配のルールを作るということは人間関係をカテゴリー化することになる。それはSさんとTさんの親子関係が他の例えばUさんとVさんの親子関係と同質のものを見なすことである。彼らはそのようには考えず、絶えず具体的な状況を重視するというので、ルール化しない方法で食物分配をおこなっていると考えられる⁷⁾。

Ingold (1999: 406) はBird-David (1994) を引用しながら次のように述べている。

より正確には、バンド(北西注:バンドとは狩猟採集民の集団に対して使われることが多かった用語)の文脈における親族関係は「部族“tribal”」社

会の研究によって私たちが慣れ親しんでいる親族関係とは違う秩序である (Bird David, 1994)。それは、形式的に組織化された社会的なルールや規制の構造の中である地位を占めることにより課せられる特別の責任や義務によってよりも、食物分配、居住、付き合い、記憶によって構成されるものである。

直訳ではなかなか理解が難しい文章であるかもしれないが、Ingoldは、狩猟採集民の集団が親族関係に基づいて義務を課すようなルールに従って社会が秩序化されるのではなく、一緒に暮らすことによる食物分配を含む日常的な付き合いによって社会が成り立っていると述べている。ここまでの私の議論に引き付けてみるなら、日々の暮らしによって成立するその場の具体的な状況に基づいて彼らが行動しているということであろう。

5. 個人の属性に基づいたグループのあり方

私たちの社会では、個々人が共通の属性を持つことをもとに特定に集団に属する場合が多い。例えば日本国民という集団は日本国籍を持つという共通の属性によって形成される。学校や会社のメンバーといった場合もある。また、「部族」社会におけるクランやリネージといった集団もこのような集団だろう。このような集団はこれまでの多くの研究によって実際には状況に合わせて境界を越えて行き来する人たちがいるといったことが指摘されてきたが、その集団のメンバーやまわりの人たちは境界のはっきりした排他的な集団であると考えていることが多い。だからこそ、それに対する批判として現実の境界のあいまいさが指摘されてきたともいえる。

そのような集団は時には他の集団と対立・対抗することもある。民族紛争のような深刻な事例もあるが、大学間のスポーツの試合などでも両者の対抗意識があらわになり、選手だけでなく応援する在学生や卒業生などの観衆も含めて戦いが繰り広げられる。このような試合を通して選手や在学生、卒業生などの帰属意識が確認、強化されるといったことがみられる。

アカにはdi.kandaと呼ばれる父系出自集団が存在する。彼らは自分自身のdi.kandaはもちろん同じキャンプに暮らす他のメンバーのdi.kandaをほとんどすべて知っている。とはいえ、di.kandaが彼らの日常的な付き合いに影響を与えているようには見えない。ある特定のキャンプを指すときにあるdi.kandaのキャンプであるという言い方をされることはない (kombetiや場所の名称で言われることはある)。キャンプは何らかの親族関係を持つ人によって形成されることがほとんどなので、特定のdi.kandaに属するメンバーが多い場合はあるが、他のdi.kandaのメンバーに対して排他的になることはない。

食物分配においてもdi.kandaが関係することはない。

Di.kandaの名称には農耕民と共通するものがある。それには近隣の農耕民の場合もあるが、遠く中央アフリカ共和国のロバイ川流域で調査していたフランスチームの文献に出てくるものもある (Bahuchet, 1985)。先に紹介したA氏のdi.kandaがまさにそうであった。これらのことから、di.kandaは現在もしくは過去に緊密な関係にあった、より具体的には擬制的親族関係 (北西, 2010a) にあった農耕民の父系出自集団の名称を取り入れたものであり、この父系出自集団の仕組みも農耕民から取り入れたものであると予想される。農耕民にとっては自身のアイデンティティとしても、集団を構成する原理としてもこれは重要なものである (埜, 2010)。しかし、アカにとってはアカ同士の関係においてdi.kandaが言及されるのは、同じdi.kandaの男女の間の婚姻が望ましくないと考えられている (とはいえ、実際には行われることもある) といったことくらいで、食物分配の義務や居住を共にする義務といったものはない。アカと農耕民との関わりでは、アカが知っている農耕民が全くいない村を訪れたときに、まずは自分と同じdi.kandaに属している人がいないかを探して、見つければまずはその人をその村で頼ってみるということを行う。ただし、これはアカ側からはあくまでもきっかけだけであり、もしその農耕民とうまくいかないならその関係を解消しようとする。つまりアカにとっては義務ではない。一方、農耕民側はもっと義務的な関係であると考えていて、両者の認識には齟齬が存在する。

アカにおいて、ある属性を持つ人たちに共通の特定の義務や権利を与えるということはあまりない。これは男女の役割分担でも当てはまると思われる。このように述べると、狩猟採集民の男女の分業に関する常識とずれていると感じるかもしれない。一般的には男性は狩猟、女性は採集 (植物などの) という分業が狩猟採集民に存在するといわれてきた。Man the Hunter (Lee & DeVore eds., 1968) という本に対抗して女性の採集活動の重要性を指摘したWomen the Gatherer (Dahlberg, 1981) が出版されている。アカにおいても、男性が狩猟とハチミツ採集を行い、女性が食用の植物を採集することが多い。狩猟の中でも網猟は例外的に男女とも参加するが、網猟のなかで分業があり、通常は網を張って獲物を追い込む作業を男性が行い、女性は網のそばで待って網にかかった獲物を捕まえる作業を行う⁸⁾ (Kitanishi, 1995)。キャンプで煮込み料理を作ったり水を汲んできたりするのもほとんどが女性である。また、彼らが使用する道具では男性が使う道具 (槍や斧など) は男性が、女性が使う道具 (かごや腰蓑など) は女性が材料を採集して製作するのが一般的である。

とはいえ、アカにおける性別役割分担を属性による禁止に基づいたルールと理解するのは間違っている。例えば、彼らには、女性が狩猟をしてはいけないとか、槍などの狩猟道具に触ってはいけないといった禁止のルールは存在しない。実際、女性が狩猟を行うことはある。私が観察した例を以下に挙げる。

キャンプの近くで獲物を見かけたという話をキャンプにいた女性たちが聞いた。そのとき、成人男性は集団槍猟に出かけていていなかった。その女性たちはキャンプに残された槍を手にとって獲物があるほうに走り出した。

この例において女性は全く躊躇することなく槍を手にとっていた。女性が槍をもって獲物を追いかけることは禁止されていることではない。網猟に女性だけで出かけ、いつもは男性が行っている網を張る作業などを女性が何のためらいもなく行っていたこともある。ピグミー系狩猟採集民における女性の狩猟への参加を分析している論文も存在する (Noss & Hewlett, 2001)。

逆に男性も女性がよく行う作業をすることがある。女性がいないときには調理を自身で行ったり、女性がよく採集する植物性の食物（ヤムやナッツ）を持って帰ることもある。

頻度を基準にするとアカには男女の分業は存在し、熟練度という面でも例えば男性のほうが女性よりも平均的に狩猟技術に優れているということはある。しかし、彼らの分業は排他的ではなく、必要な時には躊躇することなく通常は異性が行う作業を行うし、それが非難されることはない。男性であることや女性であることに基づいて何かを禁止するようなルールを作るという形をとらないようにしている。これは個々人ができるだけその場の具体的な状況に合わせて対応するという彼らのやり方を表している。

このような役割分担のあり方がアカの男女の間の不平等や上下関係の形成を妨げているのかもしれない。禁止する（もしくはルールに従わないと罰を受けたり非難されたりする）形での性別役割分担が存在すると、一方の性しか行えない役割に高い価値を与えることによってその仕事を行う性別の人たちにも高い価値を与える、もしくは逆に一方の性しか行えない役割に低い評価を与えることによってその仕事を行う性別の人たちに低い評価を与えるということが生じる。これは実際に多くの文化で見られることだろう。禁止ではなく頻度が低いということなら、できないわけではないので仕事と結びついた男女の上下関係は形成されにくいのではないと思われる。

とはいえ、アカにも性別役割分担に基づいた禁止ル

ルが全くないわけではない。それは精霊儀礼に関するものである。アカは歌と踊りを伴う精霊儀礼を頻繁に行う。精霊はキャンプから見えない近くの場所で精霊のコスチュームを着けてキャンプに現れる。その場所とキャンプをつなぐ小道の間には境界が作られ、そこから先は精霊の秘密結社に加入している人しか進むことができない。その秘密結社に加入できるのは男性のみであり、女性はその場所に近づいたりのぞいたりすることは禁止され、キャンプに現れた精霊に触れることも避ける。また、精霊が近づくと女性たちは叫び声をあげて逃げる。精霊に関する秘密は結社に加入した男性しか知ることができない⁹⁾。

Woodburn (1997) によると、南部アフリカの狩猟採集民サンのトランス・ダンスでは男女のバランスの取れた参加が強調されるが、タンザニアのハッザやコンゴ盆地のピグミーでは男性の秘密結社があり、儀礼において男女間のヒエラルキーが形成される傾向があるという。アカの儀礼における性別役割分担は狩猟などの性別役割分担と異なる性質を持っていると思われるのだが、なぜ儀礼だけが特殊なのかについての答えは持ち合わせていない。近隣の農耕民も儀礼において男性だけが加入可能である秘密結社を持っており、そこから影響を受けた可能性もあるが、儀礼そのものはかなり異なっているので、そのように結論付けることは難しい。今後の課題である。

6. 持続的で排他的なグループを形成しないこと

日本の社会では、数十人の集団が形成されると、その中で仲の良い組み合わせやサブグループが形成されることが見られる。学校のクラスでそのような固定的な人間関係が形成され、そのメンバーに組み込まれた経験がある人も多いただろう。時には他のサブグループのメンバーとあまり付き合わなくなったりすることもあるかもしれない。また、そのサブグループを抜けたり、他のサブグループに移るためにはかなりの労力が必要になったりもする。会社などでも派閥と呼ばれるサブグループが形成され、敵対することもある。このようなサブグループについて食物分配と居住（誰と一緒に住むかということと一緒に住んでいるときの小屋の配置）のデータに基づいて分析したい。

私がアカにおける食物分配の分析をしようと考えたとき、私は特定のメンバー間において頻繁な分配が存在していないか、さらにグループ内で食べ物を分け合うサブグループが存在していないかといったことを調べようと思っていた。その結果は北西 (1997) で詳しく分析しており、肉の第2次分配では特に偏りが見いだせなかったが、第3次分配（女性による料理の分配）では近くに小屋を構える人や親族関係が近い人により頻繁に分配する

傾向がみられた。近くに小屋を構える人には親族関係が近い人が多いのでこの二つの要因を分離することは難しいが、キャンプ内で離れた場所に小屋を作っている近親者や近くにいるけれど親族関係が遠い相手にも頻繁に分配することから両方の要因が作用していると思われる。

しかし、彼らの料理の分配に見られるサブグループは日本の学校のクラスでみられるようなサブグループとはかなり違うということを感じていた。それは端的に言えば、状況に応じて柔軟に対応する、というこれまで本稿で彼らの特徴として示してきたことと共通する。詳しくは北西(2004)で紹介しているが、キャンプのメンバーの一部がキャンプを離れたときには、キャンプの中に二つあったサブグループが一つになり、そのメンバーが戻ってきたときにはまた二つに戻るといった形をとっていた。つまり、同じキャンプに住んでいたにもかかわらずそれまでほとんど料理を分けていなかった相手に突然毎日料理を分配しだし、その後また分配しなくなるということがみられたのである。私の感覚では食べ物を分け合うことは両者の間の密接な関係を示すものであり、単にキャンプのメンバーの人数が変わったということによって簡単に相手を変えてしまうということに違和感を覚えたのである。

私が何に違和感を抱いているのかを分析してみる。私たちの社会では他者と頻繁にモノをあげたりもらったりすることは、その相手と密接な関係の形成・維持・強化につながる。いわゆる贈与交換である。さらにモノをもらうとそのお返しを期待されることもある。私がアカの料理の分配で観察した閉じたサブグループでの頻繁な料理のやり取りは、私の感覚ではそこに強固なつながりが生じて当然であるように見えた。閉じたサブグループでの頻繁なやり取りはそのグループの外の相手には分配をしないということでもある。この人には分けてこの人には分けないということを毎日何回も繰り返すことはサブグループの輪郭を次第に明確にしていくことになるように思えた。その中でキャンプのメンバーの一部が抜けることでそのサブグループの枠組みがなくなり、いなくなったメンバーが戻ってくるとまた復活するというのが「節操のない」ことのようにみえたのである。

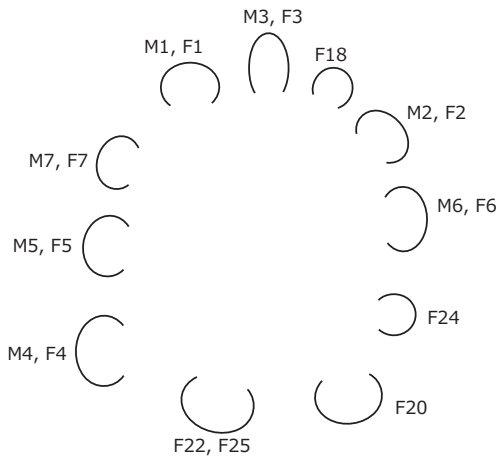
このような「節操のない」食物分配が贈与交換と異なった性質を持つのではないかということは北西(2010b)で分析した。そこでも過去の食べ物のやり取りにとらわれないことなくその場の状況を重視するのが彼らのやり方ではないかということ述べた。一方で、これを持続的なサブグループを作らないという視点からも考えることができるのではないと思われる。次に述べる居住の分析と同じ話になるので、次に進みたい。

調査地のアカは数週間もしくは数カ月ごとにキャンプ

地を移動しながら生活をしてきた。私が主な調査対象としていた集団は付近で最も大きな集団(80名程度)で、時にはいくつかに分裂をしたり、また一つにまとまったりといったことを繰り返していた。その中で誰と一緒にキャンプを形成するか、またそのキャンプで誰の近くに小屋を作るかということは、彼らの人間関係を表すものであると思われる。私は、大きな集団の場合、その中にサブグループがあり、離合集散する場合もそのサブグループを単位に行っていると予想していた。私はそのようなサブグループを見出そうと、およそ一年間に渡り、移動や離合集散するたびに可能な限りキャンプの構成メンバーとその小屋の配置を記録していた。

その結果は私の予想とかなり異なっていた。まず、彼らの中に一緒にキャンプを形成する明確なサブグループを見出すことができなかった。私が彼らと共に生活をしながら観察をしていると、誰と誰が仲が良いということはかなり感じることもある。その多くはキャンプにおける小屋の配置が近いことが多い。キャンプが分裂するときはこの中の良いメンバーが単位となってもよさそうなものなのに、そうはならない。詳細な分析は紙幅の関係上別の機会に行うこととして、ここではその一部を紹介したい。

私の調査していた集団は、1991年11月9日には二つのキャンプに分かれて住んでいたのだが、その二つのキャンプにおける小屋の配置を示したのが図2-1、2-2である。彼らは11月11日に同時に別の場所に移動し、一つのキャンプを形成した。それが図2-3である。図2-3では図2-1の人たちが図の上の方に、図2-2の人たちが図の下の方に位置しており、これだけを見るならこれらがサブグループを形成しているように見える。彼らのほぼ全員が11月19日に別の場所に移動し、図2-4にその配置図を示した。その時も図2-1と図2-2の人たちがキャンプの中で別々になっていることがわかるが、例外があり、M14、F14は図2-1の人たちの場所に入っている。さらに彼らは1992年1月9~11日の間で徐々に二つに分裂し、一つは森の中に、もう一つは村近くにキャンプを形成した(図2-5、2-6)。この二つのキャンプの両方に図2-2のキャンプのメンバーがいることから、11月段階でのサブグループは1月にはすでに見られなくなっており、別のサブグループが形成されていることがわかる。ここでは3カ月間の移動を示したが、調査期間中を通してこのような一緒に住むメンバーやキャンプ内の小屋の配置の変動が見られた。



Mは男性、Fは女性を表す。弧で開いている部分は入り口を示している。
番号は北西(1997)の図3aの家系図に対応している。以下の図も同様。

図2-1. 1991年11月9日の小屋の配置図(その1)

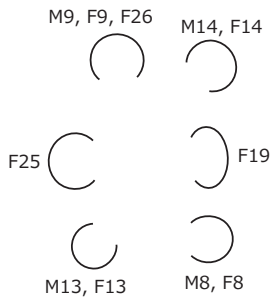
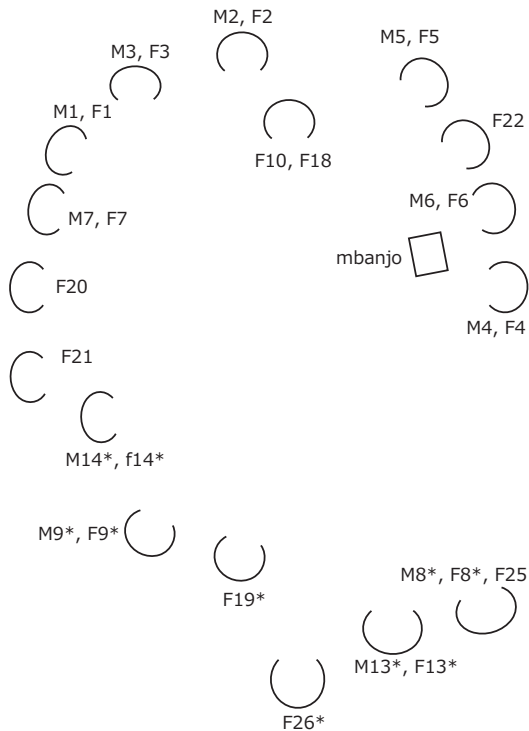
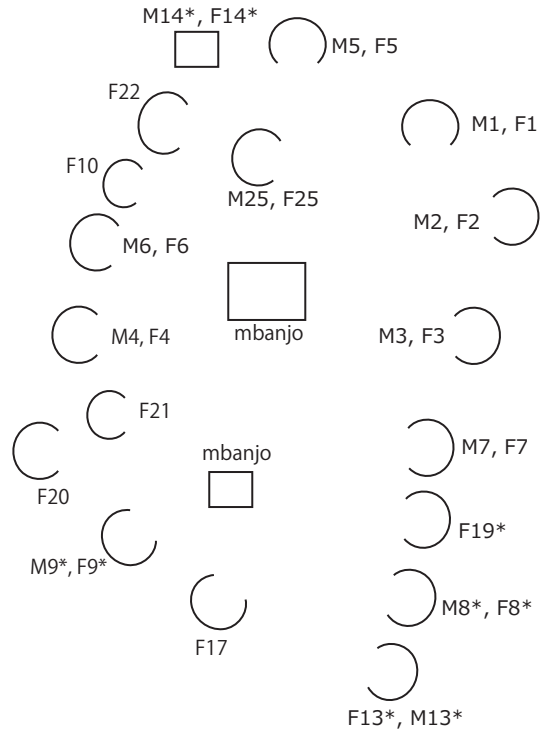


図2-2. 1991年11月9日の小屋の配置(その2)



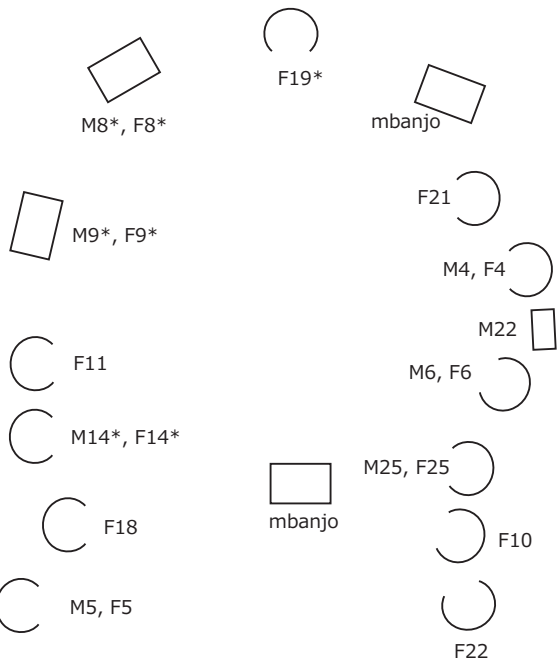
「*」は図2-2で示したキャンプの人たち
mbanjoは男性のたまり場的小屋

図2-3. 1991年11月11日の小屋の配置図



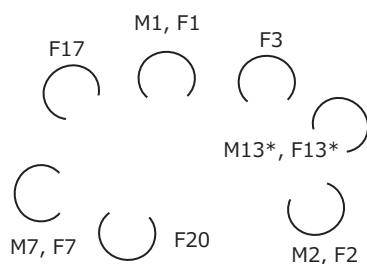
「*」は図2-2で示したキャンプの人たち

図2-4. 1991年11月19日の小屋の配置図



「*」は図2-2で示したキャンプの人たち

図2-5. 1992年1月20日の村近くのキャンプの小屋の配置図



「*」は図2-2で示したキャンプの人たち

図2-6. 1992年2月10日の森のキャンプの小屋の配置図

このような彼らの人間関係のあり方は、本稿でこれまで述べてきた抽象化を避けるという彼らのやり方と関係しているように思われる。例えば、B、C、Dさんでサブグループα、E、F、Gさんでサブグループβを形成しているとすると、EさんにとってB、C、Dさんはサブグループαのメンバーの一員として抽象化され、その一員として何らかの共通性を持った人間関係を形成することになる（F、Gさんも同様）。アカはそうではなく、あくまでもEさんはB、C、Dさんと個々にその場の状況に合わせた関係を形成するのである。このため、キャンプの分裂時にはサブグループを形成しているように見えるものの、そのサブグループに見える集団を全体として縛るような力はない。状況が変わればまた個々の関係に基づいて新たに一緒に暮らす人を選んでいくことになる。食物分配に見られるサブグループも同様に見なすことができるのだろう。

私はこの論文で、リンガンガ・マカオ村には1992年には9つの居住集団が存在していたと述べた。アカの集団のメンバーシップが上記のような形態をしているとするなら、そもそも居住集団とは何なのだろうかという疑問が浮かぶ。持続性や求心力を持った集団なのだろうか。彼ら自身で居住集団について言及するときは、kombetiと呼ばれるその中心となるメンバーの名前を用いて、A氏の人たちといった言い方をすることがある。そのメンバーはほとんどの場合、A氏と遠い近いはあるものの何らかの親族関係を持っている。居住集団のメンバーの多くはkombetiと共に住むことを選択した人たちである。多くの場合kombetiは年長の男性で人望がある人である。私の印象ではあるが、いくつかの集団を観察した結果、その中心となっているのが時にはkombetiとその妻の二人だったり、兄弟だったりすることもあるようだ。大きな集団になるとkombetiに直接つながりがあるというよりも、kombetiとつながりのある別の居住集団のメンバーとの関係に基づいてその集団に属している人もいるようである。

この居住集団も集団全体としてまとまっているのでは

なく、個々の関係に基づいて状況に合わせてその集団に加わっているとみるべきだろう。居住集団の参加には強制力はなく、別の何らかの関係のあるkombetiのキャンプに参加してそこで生活することを選択することに何の問題もない。実際に複数の居住集団を行ったり来たりする人も観察され、そのことをアカは非難したりはしない。

7. 考察

ここまで、数を数えることから始まって、親族関係や性によるカテゴリーに基づいたルールが見られないこと、食物分配や居住において持続的・固定的なグループを形成しないことを分析してきた。これらに共通していることは、物事を抽象化してひとまとめに同質のものとして取り扱うのではなく、個々の具体的な状況に応じて対応しようとする傾向があるということである。

私たちもそのように対応することは日常的にある。例えば、私は大学の教員であるが、自分とは違う学部の学生100人相手の講義をするときには、その100人の個々の状況に配慮することなく、画一的に講義を進めていくが、卒業研究のゼミなら個々の学生の違いに基づいてそれぞれに合った対応をしようとする。とはいえ、彼らは〇〇学部の学生という属性に基づいたルール（卒業研究が卒業のためには必修の単位であるなど）に従わなければいけないし、私もそのように指導する。

この論文を執筆中にあるニュースを見た。それは35人もの犠牲者が出た事件の遺族のインタビューである。「…それぞれの名前を持っています。私の息子は〇〇〇〇（北西が省略）という名前を持つ。それが（犠牲者数の）35分の1で、果たしてそれでいいのか。…クリエーターで名前があり、頑張ってやっていた人たちに、残されたものができることは、多くの人に記憶していただく、忘れないでくださいということしか、できないと思うのです」（京都新聞ウェブサイト、一部省略）。父親にとっては35人の犠牲者の一人ではなく、名前を持ち作品の製作に彼にしかできない貢献した息子であり、他の人たちにもそう認識してほしいということなのだろう。しかし、事件や作品にあまり関心のない人たちは35人の犠牲者うちの一人と認識してしまう。私たちの社会でも数として抽象化することで抜け落ちてしまうことがある。その一方で、全ての人を個別の人として認識するにはあまりにも人数が多すぎて人間の能力を超えてしまうということも事実である。アカも物事を抽象化しないというわけではなく、子どもが何人いるとか、イノシシが何頭獲れたとかいう形で数を数えることもある。頻度や重点の置き方が異なっているのである。

アカの個々の具体的な状況に応じて対応するというやり方は、彼らが比較的少数の人たちと付き合い、複雑な

組織や階層を作らないということと関わっている。大人数で複雑な組織や階層を持つ社会は、属性によるカテゴリーに基づいて決まるルールがなければ成り立たないことは明らかである。ただし、彼らのこのような対応のあり方が原因で複雑な社会が形成されない、というような因果関係としてしまうのはあまりにも議論を単純化しすぎているように思える。この点については、文献などを通して他の人たちについてさらに情報を集めて分析をする必要があるだろう。

個人をひとまとめとせず、個々の状況に合わせて対応する傾向があるという話をこれまでしてきたが、ここで個性という視点から見ていきたい。彼らが個人をひとまとめとしないということから、彼らは一人ひとりの個性を重視していると考えられるかもしれない。ここで問題となるのは個性をどうとらえるかである。私たちは、個性をどのような状況であっても変わらない自分らしさのようなものであると考えがちである。現在の若者の個性を分析する材料として櫻坂46のデビュー曲サイレントマジョリティを見てみよう。この曲は発表当初から多くの人の注目を集め、2016年上半期で約35万枚を売り上げ（ORICON MUSICウェブサイト）、櫻坂46はその年の紅白歌合戦にこの曲で出場した。その中に「君は君らしく生きて行く自由があるんだ、大人たちに支配されるな、…君は君らしくやりたいことをやるだけさ、One of themに成り下がるな」という歌詞がある（秋元, 2016）。この曲は学校のクラスメートや先生、親などの大人との関係に悩む若者のことを歌っている歌と解釈できる。この中で歌われている「君らしさ」は、まわりの人たち特に大人からの影響を跳ねのけ、クラスメートなど他の人たちに同調しない自分らしさである。このような他者との違いを積極的に強調する確固とした個性は、「One of them」、つまりひとまとめにされることへの抵抗としてある。

一方でアカの場合はそもそもあまりひとまとめにしないので、抵抗する必要もない。アカは、他者との違いを強調し状況によって変化しないような個性を持つ存在として自身および他者を見ているわけではないと思われる。もともと人はそれぞれ異なっているので、それをそのまま受け入れ、また特定の何か（自分らしさなど）にこだわることなく、置かれた状況に応じて柔軟に変化する形の個性を持つ存在なのだろう¹⁰⁾。

他者との違いとしての個性を強調することは他者との競争が日常である社会では当然のことだろう。現在の日本のプロ野球では50本のホームランを打つことは高い評価を得るが、多くの人が100本打つ状況なら50本打つことは評価されなくなる。つまり50本打つことではなく、他の人より多く打つことが評価される。私たちの競争の

典型例が市場経済の仕組みである。より質が高くより値段が安いものが売れる。競争に勝つものが利益をあげ、競争に負けると市場から退場することになる。

市場経済での競争には貨幣という価値の評価の定量的な基準がある。質の異なる使用価値を貨幣に換算し量的な価値に変えることで比較ができるようになる。一人ひとりもしくは一つひとつのモノがそれぞれ異なった質的な価値を持つという考え方をすれば競争は不可能になる。貨幣経済があまり浸透していなかった90年代前半のアカはそのように考えることが多かったと思われる。

アカが競争をあまりしないということは彼らが他者を気にしていないということではない。逆に、彼らは一緒に暮らす人たちとうまくやっていくことにとっても気を配っている。アフリカの狩猟採集民ではたとえ狩猟で大きな獲物を倒したなど他の人から評価されるような行為をしたとしても決して自慢をすることはなく、謙虚にふるまうということが知られており（Lee, 2003; 市川, 1982）、アカも同様である。またアカは自分だけが食べ物を持っていたり、特別なものを持っていたりするという状況を避ける。食べ物の場合は分配をし、それ以外のものでも簡単に他の人にあげてしまう。彼らは他者からの嫉妬を避けようとしているのだろう。実際、嫉妬心が集団に亀裂を生じさせた事例を観察したこともある。

アカは集団のメンバーとうまくやっていくこと（例えば嫉妬されないようにふるまうこと）に気を配っているのだが、彼らは自分の行為がルールに従っていることを根拠にその行為を正当化することが難しい。なぜなら、そのようなルールがほとんど存在しないからである。食物分配でも肉の第一次分配を除けばこう分けておけばいいというルールはなく、常にその場の状況に合わせて判断をしている。逆にたとえ嫉妬心を引き起こす行為（例えば財の独占）であったとしてもそれを認めるような所有や分配のルールがあれば、それに従っているということで正当化されるかもしれない（私たちの社会の私有財産制がそれにあたる）。ルールがなく他者に対して常に配慮するという彼らのあり方が、狩猟採集民でよく言われる平等主義（Woodburn, 1982）の基盤の一つになっているのではないだろうか。

本稿で議論した話の多くはその立証に十分なデータを備えているとは言えないかもしれない。本来は追加の調査を行ってこの論文で提示した視点に基づいたデータの収集をすべきであるが、それは困難である。この論文での議論は1991～1995年に私が調査したデータに基づいている。この論文の執筆時ですでに30年近くが経過した。コンゴ共和国では1990年代後半に内戦があって調査が困難になった。現在はかなり治安が回復しており、調査も可能なのかもしれない。しかし、WCS（Wildlife

Conservation Society) に属し、コンゴ共和国で1990年代から現在まで自然保護活動に尽力している西原智昭氏によると、私の調査地の村には木材伐採会社の道路が通り、外からやってきた人がたくさん集まって町を形成しており、アカも現金を用いて売買をしているという。村のまわりには獲物がいないので彼らが缶詰を買って食べているという話も聞いた。実際、Google Earthで調査地を見てみると、かつてアカのキャンプが存在した場所に道路が通っていて整然と建物が立ち並んでいるのが見てとれる。この論文で紹介した話はもはや過去のこととなっている可能性が高い。それが彼らにとって良いことなのか悪いことなのかは私にはわからないが、現実は無応なしに進んでいくということだ。

謝辞 本研究はJSPS科研費02041034, 04041062, 06041046の助成を受けたものである。調査地のアカおよびイケンガの人たち及び私のアシスタントであったセバスチャン・ンゴゴ氏には調査において多大なご協力をいただいた。また、ここではあまりにも多数に及ぶので名前をあげないが、コンゴ政府関係者の方々には調査許可の取得等にご協力いただき、また、アフリカ熱帯雨林に住む人々を研究する多数の研究者の方々には現地でお世話になるとともに研究に関して貴重なご意見をいただいた。ここに謝意を表したい。

注

- 1：ここで述べた彼らの思考や行動の様式とは杉山 (2019: 117) に述べられている「やり方」や「考え方」と類似していると思われる。
- 2：これについては他にも多数の研究者が議論をしているが、本稿の議論とのつながりが強いのが両者である。
- 3：たくさんの罫の個数を答えたときはコンゴ共和国の公用語であるフランス語もしくは地域共通語であるリンガラ語で答えていた。
- 4：大村 (2003) はイヌイトの遊動ルートの調査をしていく中で、彼らが一般的なもしくは通常のルート語るのではなく、特定の年のあるグループの具体的なルートについて言及したがることを述べている。この事例はアカの思考法に類似している点があると思われる。このような類似がなぜ見られるかは今後の検討課題である。
- 5：これは、彼らが全く数を数えないとか抽象化をしないということを言っているわけではない。5までではあるが以前から数字は利用していた。彼らが物事をそのように捉えがちであるということである。
- 6：料理の所有者がどのように決まるのかは北西 (1997, 2001, 2004) を参照。
- 7：アカは父親や母親、子ども、兄弟姉妹といった親族名称を持ち（ただし、類別的親族名称）、居住集団内の親族関係をメンバーは詳細に理解している。しかし、それに基づいてルールを形成しないということである。
- 8：コンゴ民主共和国北東部のイトウリの森に住むムブティ・ピグミーにも網猟を盛んに行う人たちがいるが、彼らの分業はアカとは逆で、網の近くで待つのは男性である（市川, 1982）。この点からすると、男女もどちらの作業も問題なくできるのだろう。
- 9：この結社に加入する男性はアカに限られるわけではなく、近隣の農耕民の男性にも加入している人が存在し、私自身もお金やタバコを提供することで加入を認めてもらった。とはいえ、アカ以外の男性は見学者であり、コスチュームを着て踊ったり儀礼を主導したりすることはない。
- 10：置かれた状況に応じて変化する形の個性ということにつながるものとして、アカは状況に応じて私がする質問に対する答えを変えるということがある。人類学の調査ではまずそこに暮らす人たちの親族関係を調べることから始めることが多いが、アカの親族関係を「確定」するのにかなり苦労をした。もともと結婚・離婚・再婚を繰り返しているので込み入っているということもあるが、2、3回目に尋ねたときに1回目と異なる答えが返ってくるのが何回もあった。また、後になって思わぬところでつながっていることを発見することもあった。私からすると「嘘」をつかれたということになる。私は調査者として「一貫した動かしようのない事実」を彼らに求めていた。一方、アカは「その場で最も適切と思われる答え」を返していたのであり、親族関係というその人が何ものかを示すはずのことでさえも、状況に応じて変わるものであったのかもしれない。

参考文献

- Bahuchet, S. 1990. Food sharing among the Pygmies of central Africa. *African Study Monographs* 11 (1) : 27-53.
- Bahuchet, S. 1992. *Dans la Forêt D'Afrique Centrale: Les Pygmées Aka et Baka*. Peeters-SELAF, Paris.
- Bird-David, N. 1990. The giving environment: Another perspective on the economic system of gatherer-hunters. *Current Anthropology* 31 (2) : 189-196.
- Bird-David, N. 1994. Sociality and immediacy: or, past and present conversations on bands. *Man*, N.S. 29: 583-603.
- Bird-David, N. 2017. Before Nation: Scale-blind anthropology and foragers' worlds of relatives. *Current Anthropology* 58 (2) : 209-226.
- Dahlberg, F. 1981. *Woman the Gatherer*. Yale University

- Press, New Haven and London.
- 埴狼星 2010. 「熱帯雨林のローカル・フロンティア—コンゴ共和国北部、バントゥー系焼畑農耕民の事例—」 『森棲みの社会誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史II』 (木村大治・北西功一 編) 京都大学学術出版会, pp.77-96.
- Hewlett, B. 1996. Cultural diversity among African Pygmies. In (S. Kent ed.) *Cultural Diversity among Twentieth-Century Foragers*. Cambridge University Press, Cambridge, pp. 215-244.
- Ingold, T. 1986. *The Appropriation of Nature: Essays on Human Ecology and Social Relations*. Manchester University Press, Manchester.
- Ingold, T. 1999. On the social relations of the hunter-gatherer band. In (R. B. Lee & R. Daly eds.) *The Cambridge Encyclopedia of Hunters and Gatherers*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 市川光雄 1982. 『森の狩猟民』 人文書院.
- Kitanishi, K. 1995. Seasonal changes in the subsistence activities and food intake of the Aka hunter-gatherers in northeastern Congo. *African Study Monographs* 16 (2) : 73-118.
- Kitanishi, K. 1996. Variability in the subsistence activities and distribution of food among different aged males of the Aka hunter-gatherers in northeastern Congo. *African Study Monographs* 17 (1) : 35-57.
- Kitanishi, K. 2000. The Aka and Baka: Food sharing among two central Africa hunter-gatherer groups. *Senri Ethnological Studies* 53: 149-169.
- 北西功一1997. 「狩猟採集民アカにおける食物分配と居住集団」 『アフリカ研究』 51: 1-28.
- 北西功一2001. 「分配者としての所有者—狩猟採集民アカにおける食物分配」 『講座生態人類学2 森と人の共存世界』 (市川光雄・佐藤弘明 編) 京都大学学術出版会, pp.61-91.
- 北西功一2004. 「狩猟採集民社会における食物分配と平等—コンゴ北東部アカ・ピグミーの事例—」 『平等と不平等をめぐる人類学的研究』 (寺嶋秀明 編) ナカニシヤ書店, pp.53-91.
- 北西功一2010a. 「アフリカ熱帯林の社会(2)—ピグミーと農耕民の関係—」 『森棲みの社会誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史II』 (木村大治・北西功一 編) 京都大学学術出版会, pp.21-46.
- 北西功一2010b. 「所有者とシェアリング」 『森棲みの社会誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史II』 (木村大治・北西功一 編) 京都大学学術出版会, pp.263-280.
- Lee, R. B. 2003. Eating Christmas in the Kalahari. in (J. Spradley & D. W. McCurdy eds.) *Conformity and Conflict: Readings in Cultural Anthropology*, 11th Edition. Pearson Education, Inc., Boston.
- Lee, R. B. & I. DeVore (eds.) 1968. *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, Chicago.
- Naveh, D. & N. Bird-David 2014. How persons become things: economic and epistemological changes among Nayaka hunter-gatherers. *Journal of the Royal Anthropological Institute*, N. S. 20: 74-92.
- Noss, A. J. & B. S. Hewlett 2001. The contexts of female hunting in central Africa. *American Anthropologist* 103 (4) : 1024-1040.
- 大村敬一 2003. 「近代科学に抗する科学：イヌイトの伝統的な生態学的知識にみる差異の構築と再生産」 『社会人類学年報』 29: 27-58.
- 杉山祐子 2019. 「もめごとを祖霊の世界に託して—焼畑農耕民ベンバの「考え方」—」 『遊牧の思想—人類学がみる激動のアフリカ』 (太田至・曾我亨 編) 昭和堂, pp.117-139.
- Thomas, J. M. C., S. Bahuchet, A. Epelboin 1993. *Encyclopédie des Pygmées Aka II: Dictionnaire Ethnographique Aka-Français, Fascicule 3 MB-M-V*. Peeters, Paris.
- Woodburn, J. 1982. Egalitarian societies. *Man*, N. S. 17 (3) : 431-451.
- Woodburn, J. 1997. Indigenous discrimination: the ideological basis for local discrimination against hunter-gatherer minorities in sub-Saharan Africa. *Ethnic and Racial Studies* 20 (2) : 345-361.

参考ウェブサイト

- Google Earth, <https://earth.google.com> (2019年8月28日閲覧)
- 京都新聞ウェブサイト「京アニ事件で犠牲、石田敦志さんの父会見「息子を忘れないで」」 (2019年08月27日19時30分), <https://www.kyoto-np.co.jp/top/article/20190827000122> (2019年8月28日閲覧) .
- ORICON MUSIC 「上半期 シングルランキング 1~25位」 (2016年6月24日), <https://www.oricon.co.jp/special/49069/2/> (2019年8月28日閲覧) .

歌詞

- 秋元康 作詞『サイレントマジョリティ』 Sony Music Labels Inc., 2016年.